



蛸親爺(2)

雅^が雲^{うん}すくね

空の晴れて曇りのない昼下がり、路地裏の遊歩道に面した家では大工の叩き慣れた鋸の音が響く。

「おめえ風呂入ってねえのか——おめえ風呂入って洗っとけ」という親方の声の流れ出る。

二軒離れたベンチに腰掛けて、蛸がカップ酒片手に酔い臥していた。足を垂らせて頭を後ろに倒し、墨吐き口を上へ突き出している。

「たーこたーこ。たーこたーこ。うーい」とひとつおくびをした。

「しかし、この頃の家は庭を作らねえな」と足の一本を背もたれに引っ掛け、また別の一本を使って、ベンチを叩いて寝ながら拍子をとっている。二拍子である。

合いの手を入れる様に酒を飲む。また叩く。唄う。

普請中の隣では、擁^{まがき}に咲くたんぼぼの日溜りに、猫が五、六匹、思いの向きで、やわらかに昼寝している。向いの石塀の上にも肥えた白猫が、目を細めて伏せている。

並びの一段高い塀の上に、烏がひとつ羽を休めていた。塀を宿木として足で掴まず、塀の向きに沿って坐っている。穏やかに蹲って、趣が猫である。体は丸々と膨れ、反射のある羽を膨らませている。

「なんだか、猫見てえな烏がいるね。目も猫の様だ。まわりの猫のまねをしてんだな、ありゃ」

小川青年が白く光る道を歩いて来た。

生い茂った初夏の梢の間を日の光が洩れてゆらぎ落ち、青年の額からシヤツにまで葉陰を落としている。

向こう角からお婆さんが立ち木の陰を踏んで、日傘を差して来た。後

ろからは主婦体の者がペダルを漕ぐ音を先だてて、向かう先に一刻の猶予もない一大事が控えているかの様に、自転車を飛ばして来た。片手で日傘を差して馬上の騎士の様にぐんぐん来た。青年はあらかじめ脇に寄って歩く。自転車はお婆さんを追い抜かす。青年には日傘のあおりを当てて行った。

青年は、ベンチで伸びている蛸を素通りした。

「うう、小川さん。おおう、小川さん」

蛸は起き直ると、八本ある足を上げて宙を泳ぎながら呼び止めた。

「あっ、おじさん。こんにちは」

「ちょいちょい察してくれないと。おれがここにこうしているんだから、呼んでよ。別に忙しくないんでしょ。そうだよ。ちょっと、まあ腰をかきながら」

蛸がベンチの席を叩いて誘うのに、

「はあ、でも帰らないといけませんので」

「そうなの。じゃ、同道しますよ」とカップ酒の残りをあおり、蛸はベンチを下りた。

蛸が小児の水遊び用の池に屈み込んで、溜り水に沈んだカップ酒を取り上げた。

「それ、おじさんのなんですか」

「ちょっとな、冷やしといたのよ」

蛸と青年は、奥まった路地で暖簾を出す鰻屋の『宇那、幾蒲焼』と角に出された行燈の先を曲がり、屋敷の塀沿いをともに行く。

「小川さん、今日はどっか行ってきたの」

蛸は青年の髪の毛が短く刈られ、生白い額を露にしているのを見て取った。

「ええ、午後の授業が休講だったので、髪を整えてきました」

「どうりで、今日は男前だ。床屋はどこ行ってんの。相川さんあたり」

「ええ、髭当てとか上手なのはいいんですが、あのおじさん、昔からオルバックみたく仕上げてしまわんです」

「けっこう男前で似合ってるよ」

「床屋に行った日だけ、この髪型なんですけれど」

「おれの学生の時は大学に床屋があったもんだがな。今はないの」

「今でも床屋さん、ありますよ」

「安くていいんじゃないの」

「そうですね。千五百円くらいですから」

「そこ行けばいいんじゃないの」

「ええ、でも皆角刈りにされてしまうという噂で」

「皆角刈りか。その親爺にとっちゃ、学生は皆角刈りなんだろうな」

「かなりの年季が入った人みたいですね」

「おれなんてなあ、床屋でさっぱりしたくてもこれだからな」と蛸はつるつと額から撫で上げた。

「どうも、蛸になってから髭も生えてこないね」と顎のあたりを撫でさする。

「その昔、江戸の遊び人なんてな日がな一日髭を抜いて暇を潰したそうだが、おれもス・ポ・ス・ポと毛抜きで抜くのはおもしろかったっけ。まあ、あてなくて済む様になった分には楽でいいや。その代わり、壺の掃除をしねえとな。毎度清潔。たりらりらー」

「おじさんは楽しそうですね」と青年は左に蛸を顧みて言った。

「へへっ。そうかい。蛸になってからしがらみがなくなったからな。あとささの思いに労するのは止した」と頭を一撫でした。

「しがらみですか」

「おう。柵と書いて、しがらみよ。ほれ、あの犬小屋のまわりに柵があるだろ」

路地の角を抜け、蛸の指し示した方には紅い屋根瓦に白い柵でかこった家の庭に、紅い屋根の犬小屋がある。犬小屋もやはり白の柵でかこんである。屋根にはイギリスの小国旗がしつらえてある。

「ええ、ありますね」

「あれがしがらみだな。自分も他人も通せんぼうだ」

「通せんぼうですか」

「おれあ、蛸になって、あの隙間をするするっと。大人は出られねえな。」

あの外にゃ。図体がでけえから」と足をくねらせる。

「貝が殻を棄てた軟体動物ですからね。蛸は。烏賊は殻を体内に入れたんですよね」

「へえ、そうなの。やっぱり、脱ぎ捨てるなら蛸だな。いや、ほんと。蛸になったから抜けられたのよ。これが蛸になる前に抜けられたら大したものだったかな」

「しがらみがなくなると、楽しくなるんですか」

「おうよ。世間繕いしたって始まらねえ。蛸だからな」

蛸と青年が行く先に、浴衣姿の男の小児が二人並んで歩いている。二人が横町へ曲ろうとした矢先に、後ろから警笛を浴びせる車が、自分の追求める仕事に人類の未来がかかっているとでも言いたげに走り去った。

右の小児が叫んだ。

「こら、車！」

小児は腕を振り上げている。

「小児こそしがらみがありませんよね」

「その分、蛸だって人と同じ扱ひよ。この間も、通りに出る横丁の出口で、信号を待っていたらさ、小児が二人、小さい自転車に来てな。そこに横丁から通りに出ようとしているトラックがいて、歩道も横丁の口も塞いでいるから通れねえのよ。小児がどうも横丁に入りたらしいから、おれが下がってやったら、かわいらしく頭を下げて行ったもんだ」

「それはおじさんが塞いでいたんじゃないんですか」

「いやいや。話のポイントはそこじゃないのよ。そこ行くとずれちゃうからね。おれはただ横丁の角に立っていただけよ。それを後からトラックが来て塞いじまったんだからな。おれじゃねえよ」

「小さい人は見ていてかわいらしいですね」

「昨日も、下宿のおかみが、『昼間から家でぶっ坐わってるんじゃないやね。ほかの人は皆、休みの日だつて出掛けてんだい』と下唇撥ね散らかせやがる。おめえだつて居るじゃねえか。隣近所の連中には、『じき帰って食事の用意にかからないと、蛸さんに怒られちゃうやね』とか、二枚も三枚も舌を使い分けやがって、どうせ見たいテレビが終わらない限り、作りやし

ないんだよ。それで散歩に出たら、横丁を小児が笑いながら走って行って。ぱっと心が広がったね」

蛸と青年は、路地を抜け出て、茹で小豆屋の角から暗渠に入った。端を灰色の猫が歩いて、蛸と青年の先導者の様になった。植木を並べた家の前で止まって、猫は振り返った。扉の前まで行って、再び顧みる。蛸と青年が行き過ぎるのを見計らうと、猫は伸び上って爪で玄関扉を幾度か搔いた。扉が開き、猫は家に駆け込んだ。

「僕が言うのもなんですが、近頃は小児が少なくなりましたねえ」

「今見て過ぎた家も、一昔前までは駄菓子屋で、小児が寄り集まっていたもんだがな」

「その暗渠のジャングルジムや砂場にも、小児が遊んでいましたか」

青年が言った先には、元の小流れを埋めて暗渠とした遊歩道にジャングルジムが鈍く光っている。

「暗渠だってよ。ありゃ何したんだ。土の上にコンクリートを流しちゃって」

「雨の日には泥になってぬかるむから、らしいですよ。車を出しにくいって」

「いつの間にか、暗渠沿いに家が立つ様になったけどなあ。あそこは小児の遊び場だろ。下をコンクリートで固めちまったら、うっかり転べもしねえ。ジャングルジムだけ元のまま置いて、さあ、また遊べって、危ねえっつうんだよ」

「あのジャングルジムは取り払うそうですよ」

「え、なんで」

「小児が落ちたら危ないからって。区役所がそう連絡受けたので、決定したらしいです」

「なんか順序が変だな。よくわからねえぞ」

「道端で遊ぶ小児もあまり見ませんね」

「道もなあ。ことごとく通行路として問題ねえように整備しちまうから、それ以外のことをすると危なくなるんだな。そういや、昔の小児は着物の背に、小さい紐をぶら下げていたものよ」

「何かのお呪いですか」

「小児が池なんかに落っこちそうになった間際に、神様が引っ張り上げてくれるのよ。その紐を掴んで」

「はあ、かわいらしいですね」

「だろ。ああ、着いた」

蛸と青年は『貸間アリ』とボール紙に赤のマジックで鋭く書いた札の下がる家の前に止った。一字一字に丸と三角が付けられ、連続模様をなしている。

「さようなら」

「今度野球でも見に行こうぜ。野球。それじゃあな。ああ、その前に職を見つけねえとな。まあ、いいや。たーこたーこ。たーこたーこ」

蛸が門のうちに入って咳払いを一度した。

途端におかみの、「エヘン、エヘン」という咳払いが繰り返された。

〈つづく〉